

(別紙)

成果の説明書

(氏名) 中村 彰良	(学部) 経済学部
1 重要事項 本年 1 月に著書『基礎簿記』を創成社から発行することができた。この本は平成 25 年度から簿記論 C の授業で教科書として使用することを予定している。 近年、会計基準は以前に比べて頻繁に変更されるようになってきており、基本的な簿記論の授業においても以前使っていた用語を見直すというようなことも必要になってきている。また会計基準の変更とともに簿記検定等の試験範囲の見直しも行われることが多くなっていると思われる。簿記論の授業においては、必ずしも簿記検定等の受験のための勉強をするということではないが、全く無視するというわけにもいかない。平成 24 年度まで簿記論 C の授業で教科書として使用していた『標準簿記論』(山浦瑛子編著、創成社)では、現在の日商簿記検定の 3 級の範囲の一部が抜けている状態になっていた。授業ではその抜けている部分についての解説も行っていたが、やりにくい面もあったことは確かである。『基礎簿記』では、その抜けていた部分も入っているので授業がやりやすくなり、学生の理解も進むのではないかと期待される。 『基礎簿記』については授業で使う教科書として、学生の理解が進むように工夫した点がいくつかある。まず、通常の基礎的な簿記の教科書では、補助簿などの帳簿類への記帳のやり方を関連する取引の仕訳を解説しているところで一緒に解説している場合が多い。しかし帳簿類への記帳のやり方を覚えても、簿記の仕組みを理解することに繋がらないと考えられる。却って些細なことに気を取られることによって、基本的な簿記の仕組みを理解する妨げになっているのではないかと思うこともある。このようなことから『基礎簿記』では、帳簿類への記帳のやり方の解説を最後の章にまとめた。このことによって、あまり些細なことに気を取られることなく、簿記の仕組みを理解できるようになるのではないかと期待している。 またよくいわれるように、簿記は話を聞いたり、本を読んだりするだけでは理解が進みにくく、実際に問題を解いてみたりすることによって理解が深まるものであると考えられる。簿記論 C の授業でも、問題のプリントを配るなどして授業中に問題をやらせようことがある。教科書は予習復習にも活用してもらうことを想定しているので、どの簿記の教科書にも練習問題が載っている。簿記の教科書によってはかなり多くの練習問題を載せているものもある。もちろん簿記検定の試験を受けようと思っているような人にとっては、問題を数多くやることができるので、そのような教科書が望ましいのかもしれない。しかし、簿記検定の受験までは考えていない人が簿記の自習をしていることを想定すると、練習問題があまりにも多い場合、それを全部やるべきなのか戸惑い、全くやらないことを選択することもあるのではないかと考えられる。『基礎簿記』では、各章で解説した内容を確認するような基本的な問題だけを練習問題として各章末に載せた。このことによって自習者が練習問題までやることのハードルが下がり、練習問題まで確実にやることで簿記の理解が進むのではないかとすることを期待している。 先にも述べたように、平成 25 年度の簿記論 C の授業で『基礎簿記』を教科書として使うことで、学生の反応などをみてみたいと思っている。課題が明らかになれば、今後	

の改訂等に生かしていきたいと思っている。

2 その他の事項

高崎経済大学経済学会の監事として会計監査を行った。